

はじめに

明治初期、西洋の進んだ技術を取り入れようと日本に招いた外国人技術者の指導により、近代土木技術が導入され、我が国の社会資本整備の近代化が始まりました。

当時の主要な交通は内陸水運・海運であり、政治・交通の中心として栄えていたのは港町でした。本県においても、銚子と東京（両国）を結ぶ蒸気船が利根川を往来し、そうした舟運のための浚渫や運河の開削などにおいてオランダ人技師たちが活躍し、近代的な測量や河川工事の技術がもたらされました。

その後、明治の中頃から大正、昭和初期にかけて次第に鉄道網が発達するとともに、人やモノの流れは水運から陸運へと変わっていきました。

終戦後は、東京湾の埋立てが本格化し、急速に工業化を進め重化学工業を中心とする京葉臨海工業地帯が形成され、農林水産業中心の産業構造からバランスの取れた産業県に発展しました。また、モータリゼーションの急激な進展に伴う道路ネットワークの整備・強化、新たな住宅需要の受け皿となるニュータウン建設や土地区画整理事業、土地利用の適正な規制、増え続ける水需要に対処するための水道施設の新設、都市公園や流域下水道の整備など、急速な都市化への対応を進めてきました。

こうした本県の変貌や発展、社会情勢の変化に合わせて整備されてきた社会資本の中には、明治期に作られ、今も現存する施設や、姿や形を変えつつも明治期の様子を今に伝える施設が残されています。

明治元年から起算して満150年目の節目に当たる今、水道局、企業土地管理局の協力を得て、明治から現在に至る本県の社会資本整備を振り返り、あゆみとして整理することとしました。

今後とも、これまでに蓄積してきた土木施設を計画的・効率的に維持管理し、次世代に引き継いでいくとともに、県民生活の利便性の向上や経済の活性化を図るために社会資本整備を進めてまいりますので、県民の皆様をはじめ関係各位におかれましては、本県の県土整備行政に対する一層の御理解と御協力をお願いいたします。

平成30年3月

千葉県 県土整備部長

野田 勝